

2021年5月16日主日礼拝

大井バプテスト教会

説教題「もっとも非力な行いこそ」イザヤ書56章1〜7節

主任牧師 加藤 誠

「主のもとに集ってきた異邦人は言うな。主は御自分の民とわたしを区別される、と。宦官も言うな。見よ、わたしは枯れ木にすぎない、と」(イザヤ書56章3節)、「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる」(同7節)。

ミャンマー国軍によるクーデターが起こった翌週から毎週金曜日にもたれている「ミャンマーを覚える祈り会」という小さな祈祷会があります。日本バプテスト同盟駒込平和教会の渡邊さゆり牧師の呼びかけで始まり、口コミで広がった参加者が百人前後、ネットでつながり祈ります。新田義貴兄の証しにあったようにミャンマーの少数民族にはバプテストのクリスチャンが多く、日本国内にも在日ミャンマー人の教会がいくつもあります。この祈り会にもミャンマーのクリスチャンが参加されていて、マスコミでは見えてこない、国軍支配下にある市民たちの暮らしの様子や生の声に触れて皆で祈りを合わせる、貴重な機会になっています。

2月に起こったような大規模な抗議デモはすっかり抑え込まれ、表面的には沈静化しつつあるように見えますが、市民たちは非暴力の運動で抵抗を続けています。例えば国軍は教育カリキュラムを大幅に改革し国民の思想統制に乗り出しましたが、そのようなカリキュラムでは「教えたくない」と抵抗したヤンゴン大学の教員たちをすべて解雇し、「学びたくない」という学生たちを大学の寮から追い出しました。キリスト教系の女子大に泥酔した国軍の兵士たちが乗り込んできて「賛美歌を歌ってみろ！」とからかい、侮辱する出来事も起きているとのこと。国民の大部分が仏教のミャンマーでは、クリスチャンはこれまでも社会的圧力を受けてきたわけですが、それが国軍によって大っぴらに行われているというのです。

そのような国軍の恐怖政治に、それでも市民たちは非暴力で抵抗を続けています。ある市民は葛藤をこう語っています。「国軍の横暴を許してはならないと誰もが思っている。けれども職を失い、家や収入を失っても良いのか。生徒たちを見捨てることにならないか。ほんとうにこれは正しいことなのだろうか」と毎日のように自分の胸に問いかけている」と。何という苦しい闘いでしょうか。

わたしは戦後生まれで戦前の治安維持法による国民統制の時代を知りませんが、軍隊が権力を握り、思想や信仰を統制するとはどういうことなのか。なぜミャンマーの人びとがここまで大きな犠牲を払って国軍に抵抗しているのか。この祈り会に参加して少しわかるようになってきました。

渡邊牧師はこう語ります。「祈りという最も非力な行いこそ、圧倒的な暴力に抗して必死に立ち向かい、何とか非暴力にとどまろうとする人々への最大のアクションです。そのことを手放したら、わたしはもはや宗教者ではありません」と。

「祈り」はもっとも非力な行為に見えます。子どもにも銃を向ける非道な暴力に対して「祈り」は無力に見えます。あの十字架の上で主イエスは「主よ、彼らをお

ゆるしてください」と祈られました。その「祈り」は兵士たちにあざ笑われ踏みにじられました。「祈り」はなんと非力な行為なのでしょう。

しかし、「祈り」は神さまと私たちをつなぎ、天と地をつなぐ「最大の力」です。なぜなら「祈り」は私たちを十字架の主につなげるからです。そして「祈り」はさまざまな障壁を超えて、世界中の友と私たちをつなげてくれます。

権力やお金による結びつきは強いように見えて、結局は欲による結びつきですから、利害がずれ始めるとあっという間に崩壊してしまいます。けれども「祈り」は困難の中でこそ強い結びつきとなって、弱い私たち一人一人を神さまにつなげ、お互いにつなげて、私たちを励まし、導く力となるのです。

今朝、ご一緒に読んだイザヤ書56章には異邦人と宦官の救いが語られています。この56章は、バビロン捕囚という異国での苦難を経験し、再び故郷に帰って新しい神殿の再建に取り組むイスラエルの人々に向けて語られた言葉です。それまでは異邦人も宦官も「ケガレた民」として礼拝から排除されていましたが、イザヤは異邦人や宦官に救いを備え、共なる礼拝に招かれる神の大きな慈しみを示しました。そして「わたしの家(神殿)は、すべての民の祈りの家と呼ばれる」という神さまの新しいビジョンを示したのでした。この神さまのビジョンを実現したのがイエス・キリストの十字架です。キリストの十字架は、私たちの間にあるあらゆる隔ての壁を取り壊して和解と平和を実現し、私たちを新しい人として創り上げる、神さまの働きをはっきりと証ししています。

1981年に公開されアカデミー賞をとった映画『炎のランナー』の主人公であるエリック・リデルは、1924年のパリ・オリンピックの100m陸上競技のイギリス代表に選ばれたものの、オリンピックの100mが日曜日であると知って辞退します。「僕はイギリス国民やイギリス国王のために走るのではない。僕が走るのは神さまのため。だから日曜日は走らない」と。リデルはオリンピック後に宣教師として中国で伝道活動をしますが、日本軍の占領により捕虜収容所に入れられ、43歳の若さで脳腫瘍で亡くなりました。そこで出会ったスティーブン・メガティブという少年とこんな会話を交わします。「エリックさんは日本人の兵隊を愛せよと言うけれど、あんなひどいことをする日本人の兵隊を愛するなどできるわけがない！」と。リデルはスティーブン少年にこう語りかけたそうです。「僕も最初はそう思ったさ。でもイエスさまは愛することの難しい人を愛された。日本人を愛することは難しくても、祈ることはできるはずだ。人を憎むと自分中心の人間になる。でも人のために祈る時、僕らは神中心の人間に変えられていく。イエスさまが愛している人を僕は憎んではいけない。祈りは君たちを変えるのだ」と。この時リデルから「祈ること」を教わったスティーブン少年は、戦争が終わると宣教師となって日本に来日し、38年間、北海道や東北で神さまの愛と平和を伝える働きに仕えました。「祈り」はもっとも非力な行為です。けれども十字架の主による和解と平和の働きにおいて「祈り」は最も偉大な行為なのです。